

美術の窓(158)

「日本橋図」の定型

大和文華館館長 浅野秀剛

私は大和文華館で年に4回、「美術の窓」と題する連続講座を担当している。数年前までは、自身が研究しているテーマについて話していたが、内容が専門的すぎるといので、評判は今一つであった。そこで、浮世絵についてのポピュラーなテーマに変えたところ急に聴講者が増えた。そういうわけで、今年度のテーマは「歌川広重」である。今年はその他に他の仕事も重なり、広重について調べるものが多くなった。

広重は江戸の名所絵師なので、江戸の日本橋とは縁が深い。江戸の日本橋といえば、大久保純一氏(国立歴史民俗博物館)に「広重に見る江戸名所絵の定型」という興味深い論文がある。そのなかで最初に取り上げられているのは「日本橋図」である。「日本橋図」に江戸城と富士山が共に描き入れられるのは、明和5年(1768)刊の鈴木春信画『絵本続江戸土産』(図1)が早く、その型が次第に成長し、19世紀になると、それが「日本橋図」の定型となる。その定型となった図様をくり返し描いた絵師の一人が歌川広重(図2)である。というのが主旨と思う。この小文は、それを追認、展開、そして少し脱線しようというものである。

私は今、明和8年刊『百富士』を描いた絵師、河村岷雪の研究をしている。岷雪も『百富士』のなかに「日本橋」図を入れているが、それも、日本橋

の左上に江戸城、さらに上に富士山が描かれている。だから、その図も「日本橋図」の定型なのであるが、それには日本橋南詰にあった高札場も描かれている。じつは『絵本続江戸土産』には「日本橋図」が2見開きに互って描かれていて、図1の次に南詰の図があり、それには高札場も描かれているのである。

大久保氏が挿図として挙げた広重の錦絵に高札場がないのは、橋の北詰を北東から南西方向に捉えているためであり、「百富士」にそれが描かれているのは東南東から橋の南側を中心に描いているためである。この差は大きい。

改めて、広重の江戸名所の「日本橋図」を点検すると、ほとんどの図が橋を北東から南西方向に捉えていて、時に東から真横に見る図があり、それ以外のものは皆無に近い。ただし、保永堂版「東海道五拾三次」の「日本橋」のように、東海道の起点としての「日本橋図」はその様相を少し異にする。ご存知のように、保永堂版の「日本橋」は、南詰の木戸の南側から北を見ているので、左側に高札場も描かれている。そんなわけで、広重でも東海道のシリーズの「日本橋」は、定型でないものが少なくない。その理由は、江戸名所の「日本橋図」の定型は、東海道五十三次の「日本橋図」の視点を北東から

南西方向に改め、必然的に高札場を省いて成立したからであると思われる。

大久保氏が指摘するように、浅井了意『江戸名所記』(1662年)や菱川師宣『江戸雀』(1677年)のような近世初期の版本に描かれている日本橋図は、強い俯瞰で日本橋を捉え、橋の上や付近の様子を描いているだけで、背景描写はない。『江戸名所記』に高札場が描かれているのは、橋の南詰を南西から北東を見る方向にしたために描かれることになったもので、それ以外の意図はない。日本橋図が頻繁に描かれて図様が展開し始めるのは、東海道の道中記、絵図類や東海道中双六が人気となり、その類似的図も制作されるようになってからであろう。

現時点でその展開のスタートを、元禄3年(1690)刊、師宣画『東海道分間絵図』に置くことにしたい。「日本橋」はその巻頭にあるが、日本橋の左に小さく高札場が描かれ、江戸城は、橋の上部に橋よりはるかに大きく堂々と描かれている。江戸城が大きいのは近世初期から描かれ続けてきた東海道図屏風の影響である。江戸城の上に富士山は描かれていないが、絵図を見ていくと(広げると絵巻のようになり左方向に進む形となる)、まもなく上部に富士山が出現する。富士山は絵図の数か所に描かれているので、そこからは富士山がくっきりと見えるという意味で描き込まれていることになる。となると、江戸城の上に富士山が描きこまれるのも時間の問題であろう。

しかし、管見では享保期(1716~

36)頃まで富士山は現れない。享保6年の「新版道中双六」(本屋菊松版、国立歴史民俗博物館蔵)、享保期の二代鳥居清倍画「東海堂五十三次」(横細判漆絵6枚組、伊賀屋版、ボストン美術館他蔵)や正徳(1711~16)頃刊、石川流宣画の道中記「東海懐宝道中鑑」(須原屋久右衛門版)の「日本橋」に富士山は描かれていない。しかし、すべてに高札場は描かれている。それは、高札場が東海道の起点を示す重要な徴証であり、しかも江戸から西に進む東海道という性格上、南から北の方向に橋を捉える図にすれば京都に向かう道を自然にたどることができるからである。そうした場合、南詰の西側に置かれていた高札場がほぼ必然的に画面に入ることになる。

「日本橋図」に高札場と江戸城、そして富士山が描かれている早い例として、享保頃の「五十三次道中双六」(伊勢屋版、東京国立博物館蔵)、同「新版道中名所すご六」(鱗形屋版、東京都立中央図書館蔵)や、同じく享保期の無款(近藤清春)「東海堂五十三次」(横細判漆絵6枚組、板木屋次郎兵衛版、個人蔵)、そして享保17年刊の道中記「東海道千里の友」(松井嘉久著、須原屋茂兵衛版、図3)を見出すことができる。それ以降の双六や道中記の多くの「日本橋図」に、高札場、江戸城、富士山が描かれているのはいうまでもない。

絵本や一枚絵だけに注目すれば、「日本橋図」に江戸城と富士山が描き入れられるのは鈴木春信の絵本が早い。春信は、そこに双六や道中記の定番になっていた江戸城と富士山を加えたのではないであろうか。その春信画のうち図1が独立し、その時点で、絵図、道中双六や道中記の「日本橋図」から江戸名所の「日本橋図」が枝分かれた、と今の私は考えている。



図1 プルヴェラーコレクション



図2 広重「東都名所 日本橋の白雨」(横大判錦絵) 国立国会図書館ウェブサイトから転載

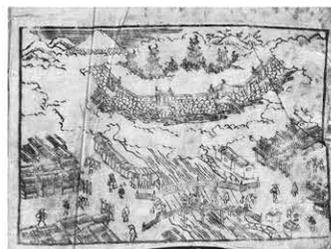


図3 国文学研究資料館蔵

季刊 美のたより No.216

令和3年10月1日

発行 大和文華館